

ジェンダー視点からの男性労働研究の本格的ステージへ

■
木本喜美子

これまで、労働研究というジャンルはあっても、男性労働研究としての展開は限られていた。労働研究と言えば、男性が担う労働を主たる研究対象としてきたが、ジェンダーとセクシュアリティをまとった男性と労働との関係を問うというよりも、労使関係、人事管理、人材育成等々をめぐって、ジェンダーニュートラルな「人」と労働に関する知見が追求されてきた。これに対して女性が担う労働を対象とする研究は、女性労働研究と冠し、労働研究とは一線を画して登場した。ここでは女性が労働市場に参入したさいに抱えこむ問題を、家庭内性別分業の延長線上で読み込もうとしてきた。この方法は、ジェンダー視点とは遠い地平にある。

これに対してジェンダー視点を労働分野で駆使しようとする研究潮流が台頭するなか、従来の労働研究が「人」として想定していたのは男性であったこと、また女性労働研究における「女性」が、特定の歴史時代の特定階層に属す女性像を前提にしていたことが明るみに出された。そして主として女性労働を取りあげた研究において、方法的刷新とそれにもとづく実証研究が展開され、労働組織のなかで男性性/女性性がつくりだされるメカニズムの探求、そして姿形を変容させながらもジェンダー実践が繰り返されていく過程の解明が図られてきた。

日本でも、ジェンダー、セクシュアリティ、身体性と感情を兼ねそなえた主体という視点を採りこんでの、女性を担い手とする労働領域へのアプローチが一定の蓄積を有するようになった。だがそうした視点を導入した男性労働研究は、決して十分であるとは言えない。英語圏の社会学者による、日本的雇用慣行下で形づくられる独特な男性性の形成メカニズムを把握しようとする実証研究が登場してきてはいるが、非正規化の進行をはじ

めとする労働市場と産業構造、テクノロジーの変動を踏まえれば、従来型の男性性は否応なく変質を余儀なくされているはずであり、それを実証的に把握する男性労働研究が求められている。

2014年11月の日本社会学会（於：神戸大学）のシンポジウムの一つとして「変容する企業中心社会の男性学的解剖」を組織したのは、その活性化を期待してのことであった。そこでは、(1)第二次世界大戦後のヘゲモニックな男性性として注目された「サラリーマン・モデル」は揺らいでいるか、(2)ケアを担う「育メン」はヘゲモニーを握りうるか、(3)非正規男性は伝統的男性性からの解放の可能性をもつか、との三本の問いをたてた。これに対して確認されたのは、(1)職場へのコミットメントの弱体化と職場外へのその増大は見られるものの、「サラリーマン・ヘゲモニー」の微修正にとどまっていること。(2)父親の育児参加への許容度が増してはいるが、ジェンダー境界の越境に対する女性からのネガティブ・サンクションも根強く、ヘゲモニー発揮には至っていないこと。(3)非正規の若年男性の抱く家族観に揺らぎは見いだせず、むしろ結婚からの逃走傾向が認められること。

日本社会学会としてはじめて男性学視点を前面に据え、労働を基軸にケア領域をも採りこんだシンポであったが、バブル経済崩壊後20年が経過してもなお、男性労働を軸とする現実自体はさほど変容していないことが確認されることとなった。それからほぼ4年たつての本特集での男性労働に関わる幅広い設定からは、いかなる事実と知見が発見されるだろうか。本特集をコーナーストーンとして、ジェンダー視点にたつ男性労働研究の本格的ステージの到来を期待したい。

(きもと・きみこ 一橋大学名誉教授)